【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

学力向上フロンティア事業中間報告書

都道府県名	福　島　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	福島県西会津町立西会津中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	４	３	３	０	１０	１７
生徒数	９７	９１	９３	０	２８１	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「学力向上への挑戦」
～　インテリジェントスクールの機能を生かして　～

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

実施学年　：　全学年
実施教科　：　国語、数学、英語、理科、社会、音楽、保健体育、技術・家庭
理　　由　：　本校は平成１４年度に町内の４つ学校が統合してできた新設校であり、インテリジェントスクール構想をコンセプトの一つとした特色ある学校である。このことから本校の充実した施設設備を利用した学習指導の可能性を模索すべく、全学年全教科にわたり研究を推進しようと考えた。

（２）年次ごとの計画

平成15年

○　**テーマ**

インテリジェントスクールの機能を生かした学習意欲向上への取り組み

○　**研究の見通し**

本校生徒の実態や、本校建設のコンセプトなどを踏まえ研究の見通しを次のよう考えた。

授業の中や授業以外の場面で、インテリジェントスクールの機能を生かしながら生徒の意欲を高めるための指導、個に応じた指導、評価を生かした指導について工夫すれば、生徒は意欲的に学習し、学力は向上するであろう。

○　**研究の内容・方法**

①授業の中で

ア、生徒の学習意欲を高めるための工夫

・体験的な活動を取り入れた指導
・身近な事象を取り上げた導入
・生徒の興味関心に応じた学習課題の設定
・充実した施設設備の活用　　など

イ、生徒の個に応じた指導のための学習形態・指導体制の工夫

・恵まれた教育施設設備の活用
・ＴＴの指導
・習熟度別学習
・学習方法別学習
・課題選択学習
・モジュール学習　など

ウ、評価を生かした指導の工夫

・学習記録表などを利用した指導
・評価と指導の一体化を意識した指導　など

②授業以外の場面で

ア、生徒の学習意欲を高めるための学校全体の取り組み

・学びの雰囲気づくり
・タイムテーブルの検討
・全校を挙げての学習コンクールの実施
・各種検定試験への取り組み
・家庭学習への取り組み方の指導　など

イ、生徒の個に応じた指導のための学習の場の設定

・教科センターの利用
・上位生徒の各種検定試験受検の奨励
・休憩時間の活用　など

ウ、家庭との連携のための評価の生かし方の工夫

・学習記録表など、家庭への連絡方法の検討
・連絡表を利用しての家庭との連携　など

※上記研究実践の内容について、各教科で焦点を絞り研究を進めてきた。

平成16年度

○　**テーマ**

確かな学力を身につけるための個に応じた指導の工夫

○　**研究の見通し**

本校生徒の実態や、本校建設のコンセプト、平成１５年度の反省などを踏まえ研究の見通しを次のよう考えた。

授業や授業を支える教育活動の中で、インテリジェントスクールの機能を生かしながら、個に応じた指導のあり方を工夫すれば、生徒の意欲は高まり、確かな学力は身に付くであろう。

○　**研究の内容・方法**

①個に応じた補充的・発展的な学習指導のあり方

・ＴＴの指導、習熟度別学習、課題選択学習、などにおける補充的発展的な学習活動
・恵まれた教育施設設備を利用した、補充的・発展的な学習活動　など

②授業を支える教育活動や、指導体制のあり方

・学習意欲を高めるための学校全体の取り組み
　各種検定試験の受検の奨励、学習コンクールの実施
・学びの雰囲気づくり
　教科センターの利用、朝の読書タイム、ステップアップタイム　など

※　上記、研究の内容①については各教科で焦点を絞り研究を進める。②については、全職員で協議しながら研究を進める。

（３）研究推進体制

①組織と取り組み

本校では、校務運営機構を、従来の校務分掌のスタイルではなくプロジェクトチームを編成してのスタイルで行っている。校内の教育活動の全てをこれらのプロジェクトチームで検討し提案する。このスタイルは、本校のように教科教室型であり教員同士が集うチャンスが少ない学校にとっては非常に有効な方法であるといえる。

②数値目標と評価

上記のプロジェクトチームでは、より具体的かつ効果的な様々な取り組みができるように、具体的な数値目標を設定するようにしている。

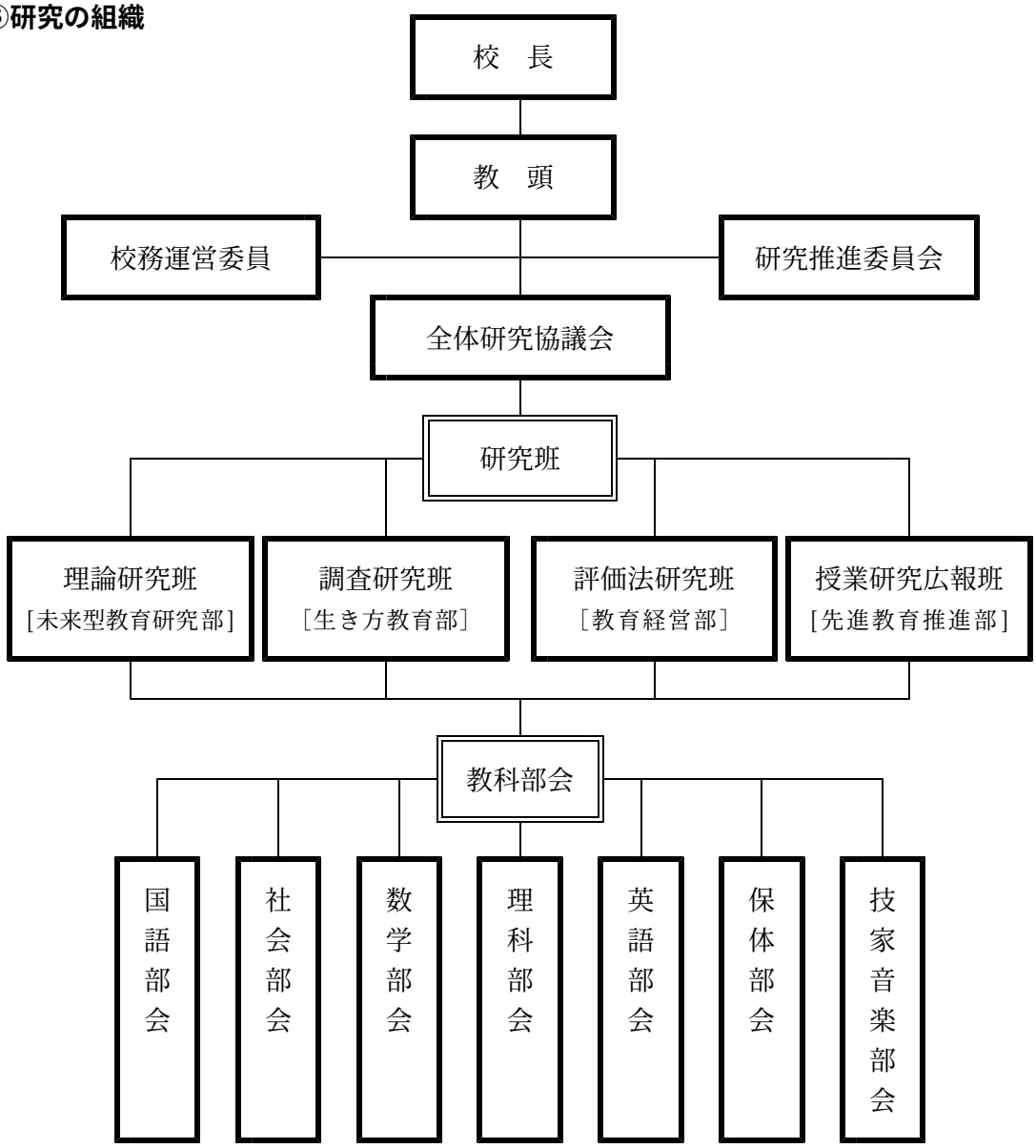
さらに、それらの目標を達成、実現できたか、をしっかりと検証しながら実践できるように、　　Ｐ→Ｄ→Ｃ→Ａ（計画→実践→評価→改善）

のサイクルを意識しより効果的な取り組みができるように工夫している。

③研究推進日程　　第１年次（平成１５年度）

月	研究手順	主な研究内容
４ ５	**◎前年度の研究の反省** **◎研究の方向性の確立** ・全体研究協議会 ・研究主題の設定 ・研究構想の確立 ・研究計画、組織の確立 ・理論研究	・前年度の研究のまとめより成果と課題を明確にし、本年度の方向性を検討する。 ・昨年度の残された課題や本校の課題などを基に研究主題を設定する。 ・主題を基に研究の構想、計画、組織を確立する。 ・文献などにより理論研究を行う。
６ ７ ８ ９ １０ １１	**◎研究実践** ・実態把握 ・検証授業 （必要に応じて部会ごと） ・日頃の研究実践 ・検証授業（要請訪問）9/16 ［授業研究会］ ・全体研究協議会 （研究の検証、修正、改善） ・検証授業（指導訪問）11/26 ・実態把握	・各種調査の結果を分析し、生徒の実態を把握する。 ・研究主題に基づき必要に応じて部会ごとに授業を行い、検証する。 ・研究主題に基づき、日頃の研究実践を行う。 ・研究主題に基づいた授業を行い、要請訪問で指導助言をいただく。 ・検証結果の考察、問題点の分析と実践結果の評価を行い、改善点を明確にする。 ・改善点を生かした授業を行い、指導助言をいただく。全体研究協議会の場で検証する。 ・各種調査の結果を分析し、生徒の変容をとらえる。
１２ １	**◎研究のまとめ** ・実践結果の整理と分析 ・全体研究協議会 ・研究の評価 ・研究集録の作成	・実践結果を整理し分析する。 ・全体研究協議会の場で、成果と課題、改善点を明確にし、研究の評価を行う。 ・研究の成果と課題を共有化できるように研究集録を作成する。
２ ３	**◎研究計画の検討** ・本年度の研究の反省 ・課題、改善点の焦点化 ・今後の研究の方向性の検討	・本年度研究の反省を基に、研究の課題を焦点化する。 ・研究課題を基に、次年度の研究の改善点、方向性について検討する。

⑤研究の組織



◎　**校長・教頭**　　：研究の計画・運営の責任者として全体を把握し、適切な指導助言を行うとともに、関係職員の役割と任務を明示する。

◎　**校務運営委員会**：研究の実践にあたり、時間配分や各種行事などとの調整を図り、スムーズな研究実践になるよう協力する。

◎　**研究推進委員会**：実践の理論研究、研究推進計画の作成、研究資料の作成、調査の企画、部会間の連絡調整など、研究推進に関わる一切の企画運営にあたる。

◎　**全体研究協議会**：テーマ及び研究方針、計画、実践内容などの共通理解を図る。
検証授業などの研究協議を通して研究の成果と課題を明らかにする。

◎　**研究班**　　：研究の全体計画を受けて班ごとに研究を進める。
（プロジェクトチームごとに班を編成する）

- **理論研究班**－－－テーマに迫るための理論研究の中心となる。
- **調査研究班**－－－生徒の実態調査などの中心を担い、変容調査などを行う。
- **評価法研究班**－－評価法や評定の方法、などについて研究を行う。
- **授業研究広報班**－指導案の書式の検討や、検証授業の企画をする。
地域との連携のため、実践内容の広報活動を行う。

◎　**教科部会**　　：研究の全体計画、研究内容を受けて、部会ごとに研究実践を行う。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

①授業の中で

ア、生徒の学習意欲を高めるための工夫

・生徒の身近なところに題材（教材）を求め、自らの課題を設定させることは、意欲を持って取り組ませるのに効果的であった。
・課題を明確にし、その解決のための活動時間を十分に確保することにより、意欲を持続させ積極的に取り組む姿が見られた。
・単元で身につけさせるべき目標（知識・技能）を明示し、見通しを持って取り組ませるように配慮することで、毎時間の流れを把握し、次時の学習を楽しみにするような感想が見られるようになった。
・教育機器を活用した授業の導入や展開は、生徒の学習意欲を喚起するのに役立った。
・基本的な学習（練習）のあとで、その後の学習方法を選択させることにより、自分の能力に合った課題を見つけることができ、意欲を持って取り組むことができた。

イ、生徒の個に応じた指導のための学習形態・指導体制の工夫

・教材に応じて個人、小集団、一斉などの学習形態を工夫し、意図的に個人の活動の場面を設定することにより、一人ひとりの活動を促すことができた。
・課題や場面に応じて、ST（ステューデント・ティーチャー）の活動を取り入れ、上位生徒の学習内容の確実な定着、下位生徒のための支援をしたが、教え学び合う雰囲気が生まれ、学習意欲もつながり、効果的であった。
・T・T の実施は、生徒の学習活動を多面的に見ることができ、個に応じた指導の充実の点で非常に有効であった。
・英語科では、年３回のクラス編成を行い、同学年同時間に T・T による授業を行っているが、学級を越えて、新鮮さと緊張感を持って授業に取り組むことができた。
・単元テストの結果をもとにグループ分けをし、習熟度別学習を行うことによって、個に応じた単元のまとめの学習をすることができた。
・年２回のモジュール学習を実施したが、生徒の取り組みは積極的で、特に、実験、実習、実技を伴う教科では、７５分のロングモジュールが有効であった。

ウ、評価を生かした指導の工夫

・年間指導計画に位置づけられた評価規準から、その単元（時間）における達成基準を作成し、評価を実施してきた。達成基準の作成は、単元全体の学習の流れを明確にし生徒自身の学習の振り返り（自己評価）にも大変有効であった。
・達成基準の問題の通過具合をチェックし、通過できた生徒には、さらに学習内容の深化を図り、できない生徒には、ST（ステューデント・ティーチャー）や教師の指導によって通過できるように働きかけた。
・「スタディー・スケジュール」の活用は、生徒への適切な支援や生徒自身の活動を振り返りとして有効であった。また、単元全体を通して自己評価を行うことで、毎時間のまとめや疑問の解決に役立った。
・学習カードを利用し、点数化したり、自己評価カードを作成するなど評価の工夫に努めた。生徒の反省や感想の記入は、その後の指導や評価に役立った。
・観点別評価規準に基づいた絶対評価の完全実施を目指し、評価規準表を作成し授業の中で生かすように努めてきた。

②授業以外の場面で

ア、生徒の学習意欲を高めるための学校全体の取り組み

・学習資料や生徒作品の掲示・展示など、教科教室や教科スペースの学習環境を整えることに努めた。

・教科メディアセンターから生徒に向けて教科に関する情報の発信を行った（朝、昼休み、放課後など）。授業で作成した生徒作品の情報は大変有効であり、ビデオ教材の放映も学習への興味、関心を高めるのに役立った。

・各種検定への挑戦

英語、漢字、数学、理科、歴史、パソコン検定を実施しているが毎回多くの生徒が積極的に受検している。

特に英語検定は、希望者にだけでなく、その年度の最後の検定では、１年生全員に５級、２年生全員に４級を受験させ、現在の自分の能力を正しく判断させ、次の段階への意欲づけとしている。

・諸コンクール、コンテストの実施について

タイピングテスト、校内合唱コンクール、学習コンテストなどを実施したが、いずれにも意欲的な取り組みが見られた。

・ステップアップ学習会の実施

後期中間テスト２週間前から、全校をあげて放課後の１時間を自主学習の時間にあて、それぞれが自分の計画にそって集中して学習する体験をさせたところ、予想以上の熱心な姿が見られた。

・朝の読書の実施

８時１０分から８時２５分までの１５分間、年間を通して全校で朝の読書を実施しているが、落ち着いた雰囲気で、1 校時の授業にも良い影響を与えている。

イ、生徒の個に応じた指導のための学習の場の設定

・教科センターの利用

各種検定に役立つ資料の配置、自主学習用プリントや問題集の整備、休憩時間にパソコンを使用した自主学習

・教科ステーションに教師が常駐することで、生徒の疑問や質問に応じることができ、ALT とも気軽に会話できるように努めている。

ウ、家庭との連携のための評価の生かし方の工夫

・学習記録表の配布

・長期休業を含めた課題プリントに評価規準に基づく、評価規準欄を設け、生徒だけでく、保護者にも学習状況が把握できるようにした。

・夏休みと冬休みに入る前に、前、後期それぞれの「中間評価」プリントを家庭に配布

・「評価の仕方」についてのプリントを配布し、保護者の理解を得る。

２．今後の課題

①授業の中で

ア、生徒の学習意欲を高めるための工夫

・学習意欲調査の結果を見ると、２、３年生は向上しているのに対し１年生は項目によって低下している。原因を考えてみると、中学校生活に慣れてきて当初の緊張感が薄れてきたこと、中学校での学習内容が難しくなってきていること、授業のスタイルや

スピードなどについていけない生徒が出てきたなどがあげられる。生徒の実態に応じた指導の工夫が必要である。
・教育機器の効果的な活用を工夫することが必要である。
・生徒が身近に感じる生活体験にあった教材を開発、開拓していくことが必要である。
・達成基準を明確にした授業の推進を図る必要がある。
・興味、関心に応じた教材、題材の選択、体験活動を取り入れた基本の習得のための時間の確保。

イ、生徒の個に応じた指導のための学習形態・指導体制の工夫
・単元に入る前に学力の実態やレディネスを把握し、指導内容や学習形態を工夫する。
・課題設定学習の際に、生徒各自の学習内容をどのように全体の場で統合、共有化していくか、また、その成果や課題をその後の学習にどのように関連づけていくかその方策をさらに工夫する。
・ステューデント・ティーチャー（ST）の活用の場面を精選し、上位生徒の実力を高めるとともに、中、下位生徒の学力を確かなものにしていく。
・単元のまとめに行う習熟度別学習の体制を確立する。
・習熟度別学習のクラス編成の実施を考えていく。
・学習カードの利用の仕方を理解させ、能力に応じた活動を工夫しする。

ウ、評価を生かした指導の工夫
・単元ごとの評価規準の見直しと整備、達成基準の作成
・学習カルテ等で生徒自身に学習の成果を知らせるとともに指導者自身にフィードバックできるような工夫が必要。
・自己評価や実験レポートの考察の評価への生かし方を見直し、工夫したい。
・授業の中での評価基準表の効果的な活用と、集積したデータの分析、さらに今後の指導へどのようにフィードバックさせていくか。
・自己評価を自分の取り組みにどのように生かし、学力を向上していくか、意欲づけ。

②授業以外の場面で

ア、生徒の学習意欲を高めるための学校全体の取り組み
・学習の手引き等の作成により、自主的な家庭学習の援助をする。
・教科スペースの活用の工夫と教室の環境の充実を図る。
・毎日の学習内容を振り返り、基礎、基本をより定着できるような宿題、課題の与え方を工夫する。
・基礎学力を向上させるために、学習コンテスト以外でも教科としての手だてを考える。
・視聴覚機器を授業の中で頻繁に使うようにし限られた時間を有効活用できるようにする

イ、生徒の個に応じた指導のための学習の場の設定
・メディアセンターにおく課題プリントの内容を生徒の習熟度に応じたものにしていく。
・各種検定受検の奨励
・教科ステーションを利用して、個に応じた支援のあり方を見直す。
・教科メディアセンターで自主学習をする生徒が増えるように、学習の雰囲気作りに努め、教科ステーションにできるだけ滞在しているようにする。

ウ、家庭との連携のための評価の生かし方の工夫
・学習カルテ等で単元ごとの評価規準を明確にし、学習の結果（評価）を家庭にも知らせる必要がある。

・長期休業前の中間評価については、評価システムを確立したい。
・教科独自の評価規準表を作成し、家庭に自信を持って説明できるような評価をしたい。
・長期休業前に、それまでの評価の様子を連絡する手だてを考えていく。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取り組み

①学力の変容	各教科単元テストや定期テストによる分析	
	ＮＲＴの結果による分析	など
②情意面の変容	学習意欲検査による分析	など
③学習態度の変容	教師の観察による分析	など

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

授業研究会の目的・方法を以下のように考え、年２回実施した。

・研究主題に基づいた授業を行い、指導助言をいただく。
・検証結果の考察、問題点の分析と実践結果の評価を行い、改善点を明確にする。
・研究成果の普及のため域内の学校へ案内を出す。

※今年度は年２回の授業研究会を実施　・検証授業（要請訪問）9/16　［授業研究会］
・検証授業（指導訪問）11/26　［授業研究会］
※平成１６年度１１月に研究発表会を予定している。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　☐ １４年度からの継続校

【学校規模】　☐ ３学級以下　☐ ４～６学級
☐ ７～９学級　☑ １０～１２学級
☐ １３～１５学級　☐ １６学級以上

【指導体制】　☐ 少人数指導　☑ Ｔ．Ｔ．による指導
☐ その他

【研究教科】　☑ 国語　☑ 社会　☑ 数学　☑ 理科
☑ 外国語　☑ 音楽　☐ 美術　☑ 技術・家庭
☑ 保健体育　☐ その他

【指導法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　☐ 無